2023

国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト

優 秀 作 品 集

日本国際連合協会山口県本部
Yamaguchi Prefectural Chapter of the
United Nations Association of Japan

序

国際連合（国連）は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって設立された機関で、現在193ヵ国が加盟し、日本は昭和31年（1956年）に加盟しました。

山口県では、昭和27年（1952年）に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。

今年度の、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生によるSDGs に関する感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただき、その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部
本部長　田中　マキ子

日本国際連合協会山口県本部について

主な活動内容

- 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- 各種コンテストの開催
  「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
  「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」
  「外国人による日本語スピーチコンテスト」

ホームページ

https://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/

国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト 2023

優秀作品集目次

中学生の部 第 63 回 国際理解･国際協力のための中学生作文コンテスト

特賞（山口県知事賞）　※全国大会特賞（公益財団法人日本国際連合協会会長賞） 2

「今年、加盟国最多の 12 回目の安保理非常任理事国となった日本は、どのような取り組みをおこなうことで、世界の平和と安全に貢献すべきか。」

～ 晴れの日は、必ず来る ～

周南市立周陽中学校　３年　神 田　愛 莉

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞） 4

「本年は SDG s の中間年。2030 年までに 17 の国際目標から成る SDG s を全て達成するために、日本ができることは何か。」

～ みんなで　有言実行 ～

周南市立周陽中学校　３年　山 本　絢 楓

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞） 6

「「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。」

光市立島田中学校　３年　今 田　咲 那

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞） 8

「「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。」

～ 私たちが責任をもって成すべきこと ～

高水高等学校付属中学校　３年　穐 山　桃 子

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞） 10

「本年は SDG s の中間年。2030 年までに 17 の国際目標から成る SDG s を全て達成するために、日本ができることは何か。」

周南市立周陽中学校　３年　加 戸　七海子

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞） 12

「「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。」

～ 核兵器のない世界に向けて～

周南市立周陽中学校　３年　田 中　優 衣

高校生の部 第30回 高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト

特賞（山口県知事賞） 15

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう

「ジェンダー平等な社会に向かって」

サビエル高等学校　２年　細 見 幸 来

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞） 17

SDGs⑭：海の豊かさを守ろう

「SDGs を達成するための海響館の役割」

山口県立下関西高等学校　１年　市 原 彩 華

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞） 19

SDGs③：すべての人に健康と福祉を

「世界中に医療を届けるために」

サビエル高等学校　３年　片 山 菜 月

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞） 21

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう

「『自分らしさ』の在り方」

サビエル高等学校　２年　高 原 秋 桜

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞） 23

SDGs⑥：安全な水とトイレを世界中に

「祖父母の家での出来事から学んだこと」

サビエル高等学校　３年　山 口 輝 紗

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞） 25

SDGs⑫：つくる責任つかう責任

「フードロス」

山口県立光高等学校　１年　上 田 杏 樹

第 63 回

国際理解・国際協力のための
中学生作文コンテスト

優　秀
作 品 集

Yamaguchi Prefectural Chapter of the United Nations Association of Japan

特　賞（山口県知事賞）

全国大会　特　賞（公益財団法人日本国際連合協会会長賞）

今年、加盟国最多の12回目の安保理非常任理事国となった日本は、どのような取り組みをおこなうことで、世界の平和と安全に貢献すべきか。

～ 晴れの日は、必ず来る ～

周南市立周陽中学校　3年　神田（かんだ）　愛莉（あいり）

山口県周南市南西部に位置する大津島。全国で唯一、人間魚雷「回天」の発射訓練基地跡が残っていることで有名な島だ。太平洋戦争末期、ここから多くの若者が回天に乗り込み、戦艦目がけて出陣していった。そして、帰らぬ人となった。

三年生になってから、平和について考える機会が多くなった。社会科で太平洋戦争について学習した。美術科や国語科でも平和に関する学習を行ってきた。その中でも、特に私が平和について強く意識するきっかけとなったのは、国語科でスピーチ学習を行ったときのことだった。私は、スピーチのテーマに「紛争」を選んだ。以前、子ども兵士についての記事を読んだことがあり、この事実を伝えるべきだと思ったからだ。紛争について調べていくと、2022年時点で世界で起こっている紛争の数は56にのぼることが分かった。世界での紛争状況を知り、他人ごとだと捉えてはいけないと感じた私は、大津島を訪れ、平和についてもう一度考えてみようと思った。

回天記念館には、国のために命を捧げた方々の遺影や家族に向けての手紙、遺書などが残されていた。回天に乗り込み、自分の命と引き換えに戦艦を攻撃したのは、20歳前後の若者たちだった。それは、国のため、家族のためと信じたからなのだろう。正義のためと信じたのかもしれない。写真に写る彼らの瞳はまっすぐだった。遺書の力強い筆跡には、命を捧げる覚悟、家族への思いが表れていた。回天に乗り込むという決断をした若者たちの、恐怖と闘い、自分を奮い立たせようとする気持ちがひしひしと伝わってきた。今、紛争に身を投じる若者も同じ思いなのかもしれない。

しかし、私が最も心を打たれたのは、

「晴れの日は、何日後、何年後に来るかもしれない。しかし、必ず来る。」

という言葉だった。これは、19歳で回天に乗り込み、戦死した本井文哉さんの言葉

だ。本井さんは、戦死する二日前に、幼い弟へ二通の遺書を残している。一通は全文をカタカナで書き、弟へ別れを告げたもの。もう一通は漢字とひらがなで書き、弟を励ましたものだった。ここにある「晴れの日」とは、何だろうと考えたとき、それは、「平和が訪れる日」なのではないかと思った。平和な日々が必ず訪れると信じた本井さん。切実な思いで、この言葉を残したのだろう。

日本だけではなく、世界中で起こった過去の戦争で払われた多大な犠牲。そして、世界中で今も続いている戦争や紛争。今、自分は平和な日本で生きているからこそ、平和について考えることが必要だ。私たちには、戦争や紛争で失われた命を取り戻すことはできない。しかし、止めるための努力はできる。死の恐怖と闘いながらあの言葉を残した本井さんのように、「晴れの日」が来ることを待ち望んでいるたくさんの人々がいる。

「リオの伝説のスピーチ」で、セヴァン＝スズキさんが言っていたように、私たちは3000万種類の生物からなる大家族である。家族を見捨てることなどできないはずだ。私たちができることは限られているかもしれない。しかし、諦めることだけはしてはならない。

今年、日本は国連加盟国最多の12回目の安保理非常任理事国となった。世界の平和と安全のために、国際連合の舞台で貢献する大きなチャンスである。多くの外交努力によって、非常任理事国が可決したことに対し、常任理事国が拒否権を発動することもあるだろう。しかし、だからといって諦めることだけはしてはならない。戦争や紛争のない世界を実現するために、できることを粘り強く続けてほしい。様々な事情や利害を抱える加盟国と対話していくことは簡単なことではないだろう。私も国民の一人として、応援する。募金をすること、フェアトレード商品を買うこと、18歳になったら選挙に参加すること。できることから始めるつもりだ。

特 賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）

本年はSDGsの中間年。2030年までに17の国際目標から成るSDGsを全て達成するために、日本ができることは何か。

～ みんなで 有言実行 ～

周南市立周陽中学校 3年 山本（やまもと） 絢楓（あやか）

「有言実行」これはとても難しいと思う。口で言うだけなら誰にでもできる。でも、それをいかに自分事に捉え、考え、行動し、そして継続することは簡単ではない。けれども私は、それにつながる鍵を一つ知っている。それは、仲間、家族、友達といった人との繋がりだ。仲間がいたから、家族の支えがあったから達成できた目標がある。友達がいたから、もう一度頑張ってみよう。と思えたことがある。一人だけの力では立ち止まってしまうような大きな壁も、みんなで力を合わせれば打ち壊すことができるのではないだろうか。今年はＳＤＧｓの中間年だ。達成するための方法を考えなければならない。努力しなければならない。折り返し地点である今、私達地球に住む全人類が力を合わせて乗り越えるべき壁がそこにある。

日本の主な課題の中に、「つくる責任つかう責任」がある。これは、生産者や消費者によって捨てられるゴミを減らそう。といった項目である。ＳＤＧｓ達成のために日本は、達成率が高い国の特徴を知ることも大切だと思う。今現在、最も達成率が高いのはフィンランドだ。国土の70％が森林で覆われており、豊かな自然が大切にされている。オーロラが出ることでも有名だ。そして日本と同様、世界有数の安全できれいな水道水を飲んでいる国だ。マイボトルの使用が国民に定着しており、ペットボトルゴミの排出量削減に成功している。これはＳＤＧｓ達成の大きな一歩となる。ペットボトルたった一本で、製造からリサイクルまでに約100ｇものCO_2を排出している。一日一本として、年間で約36,500g。便利なペットボトルも地球に悪影響を与える一つの要因となる。これを知ることも、ゴミ削減を実行しようとする原動力になるに違いない。

廃棄されている食材についてはどうだろうか。私が祖父母の家に帰ったとき、近所の方のキャベツの収穫を手伝わせてもらったことがある。重いキャベツを運ぶのは大変だし、店に出せないものもある。大変な仕事だな、と思ったが、瑞々しいキャベツを見ると、収穫までに込められてきた思いや、時間が身にしみて伝わった。しかし、そんな食材も日本では年間約2,800万ｔも廃棄されている。食品ロスは、「もったいない」だけでなく、処理する際に発生する温室効果ガスが、異常気象の

一因となり、それが原因で飢餓を生むことにもなる。私もごはんを残したり、処分へつなげてしまったりしたことがある。「悪いことだ」と分かっていても「しょうがない」と心の中の悪い自分がつぶやく。ＳＤＧｓがなかなか達成できない壁はそこだと感じる。そこを克服するためにはどうすればよいのだろうか。

そこで私は、食品ロスを減らすためにエコクッキングをはじめた。きっかけは、祖母が作ってくれた、スイカの皮の漬け物を食べたことだ。廃棄されるはずだった食材をおいしい料理に変身させる。また、熟れすぎたバナナで作ったバナナケーキは、砂糖を使わなくても甘く、家族にも好評だった。地球にも、人にも優しい行動だ。

空を見上げればどこまでも続く青空が広がっている。心が和む。しかし、そんな空も私達の手によって汚染されていっている。私にはＳＤＧｓを達成するためのプロジェクトを立ち上げたり、世界中の困っている人を助けることはできないかもしれない。しかし、小さな行動の積み重ねはできる。エアコンの設定温度を上げることでもいい。シャワーの使用を一分減らすことも大切な一歩だ。私達の行動一つ一つは全て繋がっていて、やがて大きなものとなる。

私は陸上部に所属し、駅伝チームの一員だ。仲間で襷をつないでゴールを目指す。仲間でつないでいく襷は絆の象徴だ。「有言実行」という襷を国民全体で繋いでいく。これが日本にできることだ。

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

光市立島田中学校　3年　今田（いまだ）　咲那（さな）

「核兵器」と聞いて私が一番に思い浮かべるのは、もう何度も訪れた、隣県の広島である。もちろん長崎も、広島と同じく世界に二つしかない被爆地の一つであり、原爆に関する貴重な資料などが多くある。けどやはり、広島の平和記念資料館で、黒焦げた衣服、黒い雨の跡が残る壁、原爆投下の時から動いていない時計などの被爆の跡を実際に見たときの目の前の揺らぐ気持ちは忘れられるものではない。この資料館を訪れた後では、誰だって核兵器に対して肯定的な意見は持てないだろうと思った。それほどまでに、資料館で見た展示の数々は衝撃的だった。

現在では世界的に、核兵器のない世界が理想として掲げられている。しかし現状は、核兵器の廃絶は難しい状況にある。世界には未だに12,000余りの核兵器があるからだ。そのうちの九割を占める数の核兵器をもつアメリカやロシアなどが、なぜそれほどまでに核兵器に固執するのか。それは、「抑止力」のためである。核兵器には、その一つひとつに脅威的な威力がある。そのため、核兵器をもつことは、近隣諸国に大きな影響力を行使することや、国際社会での発言力を強めることに繋がる。このような政治的な面から見て、「核兵器の保有は、有効な手段だ」と思う人もいるだろう。しかし、それはあくまで使わないことが前提の考えである。いわば脅しである核の保有だが、どこの国であろうと実際に使わない保証はない。核兵器は、たくさんの命、建物、自然を焼き払ってしまう、本来人道的に決してあってはならないものだ。現在でも紛争や侵略戦争が起こっており、危険な地域もあるが、核兵器がこの地球上にある限り、私達の国日本や世界中の様々な国が平和であるのは、上辺にすぎない。核兵器の廃絶なしに、世界平和を謳うことはできないだろう。逆を言うと、核兵器を廃絶することは、真の世界平和への大きな一歩だろう。

その一歩を踏み出すために世界ができることは三つあると考える。

まず一つ目は、核兵器を持っていない国が結束を固めることである。これは今、着々と実現に向かっているようだ。核兵器を持たない国々が「核を持つことは恥だ」という考えをもつことで、核保有国を戒める雰囲気をつくるのだ。多くの国が今以上に非核を訴えれば、核保有国も、核兵器を持つことについて今一度考えよう、と思うはずだ。

二つ目は、国同士が「核がなくてもいい」と思える関係を築くことである。前述したように、核兵器の保有は、自分の国を守ると同時に、他国を牽制する手段である。核兵器を保有している国と、そうでない国があることで、そこに格差は必然的に生まれてしまう。そこで、核兵器なしに、国同士対等に渡り合える関係を築かなければならないし、核兵器を保有していたことで優位に立っていた国々も、「核兵器は持たなくていい」と思えるような関係を模索しなければならないと思う。

最後は、「核兵器はいけない」という考えを多くの人に持ってもらうことである。ＳＮＳなど、多くの人の目に留まる場所で核に関する情報を発信することだって、今の時代は簡単にできる。また、広島や長崎など、核兵器の被害の跡を実際に見られる場所だってある。「百聞は一見にしかず」を私が初めて体験したのは恐らく広島だ。いくら核の恐ろしさを、その威力を聞かされても、やはり一度その跡を見ないと気付けないこともある。とにかく、核兵器問題について、より多くの人に関心を持ってもらわなければこの問題は好転しないし、悲劇がくり返されることだって有り得る。

第一次世界大戦後、二度としないと誓った世界大戦を、世界はくり返してしまった。核にしても世界は一度過ちを犯しているはずだ。二度と悲劇をくり返さないために世界が正しい方向へ向かうよう、国際社会ができることだけでなく、私自身なにができるかを考えられたらいいなと思う。

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

～ 私たちが責任をもって成すべきこと ～

高水高等学校付属中学校　3年　穐山（あきやま）　桃子（ももこ）

「今日ここにいる若い世代の皆様へ。被爆者の方々が始められた任務を成し遂げてください。世界は、この地、広島で起こったことを決して忘れてはなりません。」これは、2022年8月6日にアントニオ・グテーレス国連事務総長が、広島平和記念式典で私たちに向けて述べたメッセージである。私たちの任務や取り組むべき課題は何だろうか。

私が、初めて広島平和記念資料館を訪れたのは、小学生のときだ。被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真を見て、1945年8月6日、広島で起きたことに恐怖を感じた。それまで、広島、長崎への原子爆弾投下の歴史というのは、教科書で紹介される過去の一コマとして思えていた自分を恥じた。危機感のない自分に腹が立った。それからの私は、被爆写真や絵画の展示があると、足を運ぶようになった。各地で開催される原爆展に行ったり、被爆者の方たちの話を聞いたり、被爆体験をまとめた著書を読むようになった。被爆時の様子を描いた絵本も多く手にとった。一発の原爆によって、広島が消え、多くの尊い命が失われた。今もなお、原爆の後遺症に苦しむ人たちがいる。その事実を、歴史の一コマとして片づけてはいけないと思った。

今夏、岩国市で行われた原爆展に行った。亡くなった幼い弟を背負い、火葬の順番を待つ少年。怪我を負った母親が赤ちゃんを抱く姿。真っ黒に焦げた服のない遺体。原爆展で見る写真は、何度見ても悲惨である。絵画のコーナーでは、広島の高校生が、被爆者からの体験を聞き取り、その様子を描いた原爆の絵が飾られていた。高校生たちは何度も被爆者と会い、被爆のことや、被爆者がどこで生まれどのように生きてきたかをつぶさに聞いた。そして、当時の写真や資料を丹念に確認しながら、作品を仕上げた。被爆者たちの記憶をたどり、高校生たちが記録として残したこの絵を見て、原爆を「自らのこと」として見つめ直すことの大切さを感じた。被爆者の立場になって想像すると、世界中に約13,000発あると推定される核兵器について、大きな恐怖を感じる。いつどこで、広島、長崎の惨禍が繰り返されるか分からない国際情勢に、強い危機感を感じる。アントニオ・グテーレス国連事務総長が問いかけた、私たちの任務は、核兵器が使われたときの恐ろしさを知ることだと思った。私が今、挑戦したいことがある。それは、被爆者の被爆体験や平和への思い

を受け継ぎ、それを伝える被爆体験伝承者になることだ。そのためには、２年間のスケジュールで、被爆の実相の講義を受け、被爆証言者から被爆体験の伝授や、講和実習の養成研修を受ける必要がある。核兵器廃絶に向けて、日本の被爆者たちは、大きな役割を果たしている。自らの被爆体験を世界に向けて発信するため、独学で英語を学んだ被爆者もいる。その悲惨な体験を、戦後何十年も語ることができなかった被爆者が、自分の体験を語り始め、力強く、核兵器廃絶と平和の実現を訴えている。被爆者の高齢化が進むなか、原爆を体験していない私たちは、被爆者が残してくれる被爆体験を伝承していかねばならない。自分事として想像し、核兵器の恐ろしさと真剣に向き合うべきだ。私たちは、平和であることが当たり前といった幸せな時代に生きているが、核兵器がある限り、大きな脅威にさらされている。どこか遠い時代の、遠い国の話のように感じていてはいけない。

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができること、世界で唯一の被爆国である日本がすべきこと。それは、核兵器による惨事を見つめ直すことだ。被爆者の記憶と、被爆者の思いを継承する。それらを、世界中の多くの人と共有する。核の脅威に対抗するために核兵器を持つのではなく、国際社会を守るために核兵器を持たない。私たちは、責任をもって伝え続ける。

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

本年はSDGsの中間年。2030年までに17の国際目標から成るSDGsを全て達成するために、日本ができることは何か。

周南市立周陽中学校　3年　加戸（かと） 七海子（なみこ）

2000年、ＳＤＧｓの前身となるＭＤＧｓが八つの目標を掲げスタートしたことをどれだけの人が知っているだろうか。少なくとも、私にとっては生まれる前の出来事で、学校の授業でも耳にすることがなかった。作文を書くにあたり、調べて初めて知った。当時、高校生であった両親も耳にしたことがないと言う。

ＭＤＧｓは、2000年から2015年の間に達成すべき八つの目標だった。そのうち『極度な貧困と飢餓の撲滅』において多くの成果が得られた。ＳＤＧｓは、ＭＤＧｓの内容を発展させたもので、2030年までに17個の目標を達成することを掲げており、途上国も先進国も関係なく取り組むべき課題が示されている。

ところで、この作文のテーマである『ＳＤＧｓの17の目標をすべて達成するために日本ができること』について考えてみた。単刀直入に言うと私は、2030年までにすべての目標を達成するのは困難だと思った。なぜなら、ＭＤＧｓのときよりも目標が約二倍に増えているのにも関わらず、15年という期限は同じであるからだ。

そんな時、母がある一枚の新聞の記事を見せてくれた。そこには、国連の親善大使に選ばれた俳優のエマ・ワトソンさんが国連でのスピーチで述べた言葉があった。

「私にはできない？じゃあ、いつするの。いまは無理？じゃあ、いつするの」

エマ・ワトソンさんのこの言葉が私の心に深く突きささった。私は前文で、2030年までに17個の目標をすべて達成するのは困難であると述べた。しかし、そうではないと考えが変わった。よく考えてみると、私はＳＤＧｓの目標達成のために自分で積極的に何かをしていたわけでもなく、「中学生の私にできることは限られている。」「国の偉い人が動かないと変わらない。」と理由を作り逃げてしまっていたことに気づいた。自分自身が、目標を達成すべき人間の一人なのだという事実に気づかされた。

そして、担任の先生から

「信頼を積み上げるのは大変だけど、信頼を失うのは一瞬」

と言われたことを思い出した。これは、ＳＤＧｓにも当てはまると思う。2000年からＭＤＧｓが始まり今まで、多くの人々が目標達成に向けて、23年間積み上げてきたものがある。それを、引き継いでいく意志がなければ、私たちが一瞬で壊してしまうかもしれない。

ＳＤＧｓが2015年から始まって今年で８年だ。2030年までの折り返し地点を通過した。ゴールの期限はあるがこの17個の目標は、人類の永遠の課題であると私は思う。世界のため、地球のためのこの目標を、ゴールを迎えたあとでもそれぞれの国が続けて行うことで、必ず達成できる日がやってくる。

「私にはできることがないから無理」ではなく「自分にできることが何か」探すのだ。そして、今すぐ行動するのだ。その気持ちがないと世界は変わらない、

私は、自分が取り組むことを三つ決めた。一つ目は、レジ袋を使わないことだ。「塵も積もれば山となる」という言葉のように、小さなことでも続ければ、世界に貢献できる。二つ目は、地域で積極的にあいさつをすることだ。これなら、私でもすぐに始められる。地域のつながりを大切にすることで、力を合わせてＳＤＧｓに取り組めるはずだ。三つ目は「国が悪い」と言わないことだ。結局国を造っているのは、私たち一人一人の国民だ。三年後、私も国の一員だという自覚を持ち選挙に参加し意志を表示する。

未来の地球への祈りがつまったＳＤＧｓ。目標を達成するために、日本はもっと「目標を達成する意志」を発信していくべきだ。それは、私たち国民一人ひとりの責任である。

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞）

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

～ 核兵器のない世界に向けて～

周南市立周陽中学校　3年　田中（たなか）　優衣（ゆい）

夏休みのある日、あるニュース番組を観ていました。キャスターの櫻井翔さんが長崎県諫早市に住んでいるおじいさんを訪れている映像が流れました。

1945年8月9日、11時2分長崎県長崎市に原子爆弾が投下されました。人口24万人の内約7万4千人が死亡し、建物は約36％が全焼、または全半壊しました。長崎原爆はプルトニウムを使用する原子爆弾で、広島に投下されたウランの原爆の1.5倍の威力があったそうです。

原爆は火薬による爆弾とは違い強力な爆発力を持っています。爆発点の温度は摂氏100万度を超え、広範囲に熱を放出し、爆心地周辺の地表面の温度は摂氏３千から４千度にもなります。鉄の溶ける温度は1500度以上なのでそれよりもはるかに熱く想像すらできません。人体へは重度の火傷を負わせ、3.5km離れていても素肌の部分がやけどするような熱さなのです。また原爆は爆発と同時に強い放射線を放出し、大量の放射線は人体に深刻な障害をもたらします。

ニュース番組の映像の中でお話をされていたおじいさんは原子爆弾によって被爆された方でした。直接被爆ではなく、間接的に被爆されています。原爆が投下されたのは長崎市ですが諫早市は爆心地からおよそ19キロの距離で直接の被害はありませんでした。その方はこの場所で被爆することになったのです。長崎市で負傷者や、火傷をした人が収容できないので、列車で諫早まで運ばれていました。その人達をホームまで運ぶ作業をしていて被爆したそうです。被爆者の衣類などに残った放射線から間接的に被爆することを「救護被爆」といいます。被害者の約１割を占めています。当時、救護被爆したことを誰にも話さなかったそうです。放射線をあびた人は嫁に来る人もいない、もらう人もいないと言われていたので救護の手伝いをしていたことは伏せていて、結婚後も家族に打ち明けなかった、言えなかったとおっしゃっていました。ところが息子さんが７才のときに白血病になり、その時初めて放射線をあびた作業をしたと家族に話しました。言葉では言い表せない気持ちで、「息子の死は自分のせいではないか」と自分を責めたのです。けっしてその方が悪いわけではないのにと、何とも言えない気持ちになりました。その後おじいさんは被爆を明かして、核兵器廃

絶を訴える活動を始めたのです。

戦後78年、被爆者も高齢になり、記憶のある世代がだんだんいなくなってきています。語る人もいなくなれば、核兵器の怖さも伝えられなくなるのが恐ろしいです。現在、核保有国は９ヶ国と言われています。核弾頭の総数は約12,500発、とても恐ろしい数だと思います。核兵器禁止条約が発効されましたが、核保有国や、核抑止力に依存する日本などは参加していません。２度も原爆を落とされ、多くの人が苦しんでいるにもかかわらず、なぜ参加しないのでしょうか。「あの国が持っているから私も」ではいつまでたっても核兵器はなくならないと思います。

原爆を落とされた国だからこそ率先して声を上げていくことが大切だと思います。核なき世界になるために日本にできることはたくさんあるはずです。

そして、「核は必要ない」という思いを世界の国々が共有することが大切で、そのためにも核兵器削減を訴えるのではなく、廃絶を目指すことが国際社会にできる唯一のことだと思います。

人は核兵器という地球上全ての生物を殺せる道具を作ってしまいました。人が作り出してしまった物だからこそ今度は人の手で無くすことを実現しなければなりません。争いの無い、核兵器の無い世の中は、今よりもっと素晴らしい世界になると信じています。

第 30 回

高校生によるＳＤＧｓに関する感想文コンテスト

優　秀
作品集

特　賞（山口県知事賞）

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう

～ ジェンダー平等な社会に向かって ～

サビエル高等学校　2年　細見（ほそみ）　幸来（ここ）

「なんで。」
と聞くと、
「うちのお父さん料理できないもん。お母さんがやるでしょ、普通。」
と返ってきた。私の家庭は、どうやら普通ではないらしい。なぜかというと、家事全般を父が行っているからだ。母親は、家事をして夫を助け、父親は一家の大黒柱であるというのが、友達の言う「普通」なのだろう。これまでの日本は、そういった家庭が多かったからかもしれない。だから、家の話をすると、
「お父さん、すごいね。ちょっと、変わってるね。」
と言われてきた。でも、私がいわゆる母の味を知らないのかというと、そういうわけでもない。母は、私や妹が小さい頃は、家庭での時間を優先し、幼稚園や保育園の送り迎えと食事、掃除などの家事全般をしていた。私達が成長してから、母の働き方が変わって、父より帰りが遅くなり、役割分担が今の形に変わっていったのだ。帰りが遅い分、朝は、母が毎日おにぎりを握り、私達を見送るようにしてくれている。「普通」なんて気にしていては、家庭は回らないのだと、父も母も、よく言っている。

私は、男子が一割と少ない高校に進学した。男女の割合が同じ位だった中学生の頃には気付かなかったが、重いものを運ぶことが多くなったと感じる。ピアノや折り畳み式机を移動させる時には、男子が集められていたことを思い出した。高校に入ってからは、運動部が集められて、率先して働くという「暗黙のルール」ができている。
「普通」や「暗黙のルール」に気づいた時、
「なんで。」
と思ったり、声に出して言えたりすることが大切なのではないだろうか。

母が受けたＬＧＢＴＱ＋についての講習の話を聞いた。母は小学校の教師をしているため、講習を受けて学んだこと、実践していることを教えてくれた。体育や水泳の着替えの時、男子と女子の着替える場所の指示を出してから、
「みんなと別の場所で着替えたい人は、後で先生の所に言いに来てね。」
と付け加えるようにしているそうだ。もし私がみんなと着替えるのが苦痛だったとしたら、こっそり先生に言いに行くだろう。体に傷のある人や、みんなに見られたくな

い気持ちが強い人のことも、守ることができる。たった一言かもしれないが、その一言の大切さを知ることができた。それから、できるだけ性別を分けて活動することを避けているそうだ。クラスの中で、生まれた時の「男子」や「女子」という性別に分けられることに、違和感を感じる子どもがいると思って、並び順を決めたり、グループ分けを考えたりしているという。男子は青、女子は赤といった性別で色分けをすることもないように気を付けているから、母は青色の水筒をクラスに持っていき、使うようにしている。その話を聞いた時、小学生の頃、私や妹の上靴は、青や赤の上靴と別に店の棚にあった、白色の物を選んで買うようにしていたことを思い出した。自分が思っていたよりも、生活の中で、性別で分けられる場面は多いのだと分かった。自分の性に違和感がある人は、「なんで」と思う場面が多いということだ。

私は今年の秋から、イタリアに留学する。日本全国から、留学する高校生が集まる、オリエンテーションに参加した。みんなの前で自由に話せる時間が設けられた時、自分の性について話した仲間がいた。生まれた性は女性だけど、生活の中で女性らしくなりたいと思う時もあれば、男性らしくなりたいと思う時もあって、自分の性についてはっきりと認識できないことに悩んでいるという話だった。だから、一人称が「ぼく」の時もあるし、「自分」という時もあるということを伝えたかったようだ。また、自分の性についてはっきり認識できていないことを、隠そうとしているわけでなく、これまで伝える機会がなかったとも言っていた。他にも、自分の性がバイセクシュアルだと、カミングアウトする仲間もいた。堂々と話す姿は、とても格好良いと感じた。私は、この出会いから、ＬＧＢＴＱ＋に該当する人が身近にいるのだという意識が、これからの「普通」や「暗黙のルール」に変わっていく必要があることを強く感じた。

ジェンダー平等な社会にするためには、正しい性の知識と、多様な性のあり方に対する慣れが必要だ。今広がっている、ＬＧＢＴＱ＋についての教育を、性に対する偏見をもつ前に行えば、全ての人にとって生きやすい社会に近づけるはずだ。私は、みんなが自分の性について堂々と言える社会が当たり前になってほしい。自分のことを隠さずに話すことのできた、仲間達の目が輝いていたあの空間こそが、ＳＤＧｓの開発目標の一つである、ジェンダー平等な社会なのだと考える。

特　賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）

SDGs⑭：海の豊かさを守ろう

～ SDGsを達成するための海響館の役割 ～

山口県立下関西高等学校　1年　市原（いちのはら） 彩華（あやか）

学校行事の一環として海響館を訪れ、下関について理解を深めるという探究活動を行いました。そこには様々な海の生き物がいました。海響館は、海の生き物に普段触れることのない私達にとって貴重な経験ができる場であり、海響館のスタッフの方々は私達を楽しませるために多くの工夫や仕掛けをされていました。そして、私はそれらを楽しむ中で、ある疑問を抱いたのです。それは、海響館にいる生物は捕食のような問題が起こることなく気持ち良く過ごせているのかという疑問です。

一つの水槽に異なる種類の魚がいて、サメのような大きな魚もいれば、その餌となって食べられてしまいそうな小さな魚も共に生活していました。確かに多種多様な生物を一度に見ることができると色合いも美しくなって、我々は癒されて海の恵みや広大さを感じることができます。しかし、捕食というリスクをどのように回避しているのかと大きな疑問を抱きました。そこで私は、捕食を避けるための取り組みとして次のような予想を立てました。それは、「栄養価の高い餌を与えてお腹が常に満たされている状態にし、共に暮らす他の魚を食べる必要をなくす」という予想です。そして、実際に海響館でお話をうかがって、空腹な状態を避けるために十分な餌を与えているということを学びました。餌にも工夫があり、その多くは冷凍魚で、解凍して使用する餌を海響館全体で調節することで廃棄量を抑え、SDGsの目標の一つである「海の豊かさを守ろう」につながるそうです。餌を与えるという些細なことにも環境保全を意識しているのは、改めて素晴らしいと思いました。

他にも、死んでしまった魚は餌や解剖に再利用したり、燃やして発電に使ったりしてごみとならないように、処理の仕方にも工夫していることをお聞きしました。

私はこれまで、海の生き物は無理やり捕獲されて水族館へと運搬され、そこでは人間にとって都合の良いように展示されているのだというマイナスのイメージを勝手に持っていました。例えば、イルカのショーでは、飼育員さんの合図にしたがって何度もジャンプをする際に、イルカは本当は疲労やストレスを感じているのではないか、各種の魚の水槽では狭いスペースで生息しているので窮屈に感じているのではないか、大水槽では、あれほど多くの生き物が長期間一緒の空間で生活していると、け

んかになって攻撃し合ったり、最悪の場合、捕食が起こったりしてしまうのではないかと感じて、そこで飼育されている海の生き物たちをかわいそうに思っていました。だから、実際に見学に行った時、自分たちは楽しむことができている反面、目の前にいる海の生き物たちは負担に感じていることがあるのではないか、適切な環境の中で気持ち良く過ごせているのか、という思いを抱いたのです。

しかし、海響館のスタッフの方々の講演があり、お話によると、海響館は、持続可能な開発目標であるSDGsの中の「海の豊かさを守ろう」という項目を達成するために様々な取り組みを行っているとのことでした。具体的な取り組みとしては、餌の容器や調理器具、スタッフの作業着やタオルなどを洗う時は合成洗剤を使用するのではなく、天然素材の石鹸を使用すること、海岸に漂着するごみを回収する活動を行うことなどがあるそうです。私達の知らないところでこうした環境に配慮した取り組みを行っているのだと知り、とても驚きました。

そして、海響館で海の生き物を飼育することによって、地球温暖化や海洋汚染、乱獲のような自然で生きるうえならではの問題から救うことにもつながるということを知りました。さらに、海響館という安全な環境へと海の生物を運び込むことは、問題となっている絶滅危惧種を保護することを意味していました。

このように、実際に海響館へと足を運ぶことで疑問を解消するだけでなく、様々な取り組みを知ることができました。その上、以前もっていた海響館に対する自分の偏見や思い込みを見直すことができました。海響館は海の生き物を保護し、多くの問題から救っているだけでなく、SDGsに積極的に取り組むことで環境を守り、それが結局広い目で見た時に海の生き物を守ることにつながっているということに気づかされました。海響館は大切な役割を担っていたのです。

今回の見学は、私自身が環境保全に対して興味を持つきっかけになりました。今後はSDGsといった観点から物事を見つめ、海の汚染防止のために家庭での油の排水に気をつけたり、時には海響館の取り組みを手本として海岸でのごみ拾い活動に参加したりするなど、普段の生活で自分にできることを実行していきたいです。

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

SDGs③:すべての人に健康と福祉を

～ 世界中に医療を届けるために ～

サビエル高等学校　3年　片山（かたやま）　菜月（なつき）

世界では、様々な分野において平等が謳われています。その中で、私は医療格差に注目しました。SDGs３「すべての人に健康と福祉を」と重ねながら、今もなお十分な医療が届かない地域に向けて必要なことは何なのか、私たちに出来ることはあるのか、私自身の経験も交えながら考えてみようと思います。

そもそも、ここでいう健康とは世界保健機構憲章によると、「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあり、人種、宗教、政治信条や経済的、社会的条件によって差別されることなく、最高水準の健康に恵まれることは、あらゆる人々にとっての基本的人権のひとつ」という意味です。では、実際にどのような課題があるのでしょうか。

大きな問題として一つ、世界中には基礎的な医療保健サービスを受けられない人が世界人口約７３億人の半分である約３６億５千万人いると言われています。これらの多くの人は、病気になっても適切な治療が受けられればまた健康を取り戻せるのに、予防接種やワクチンといった基礎的な医療保健サービスを受けられないことで亡くなっている命がたくさんあるということがこの問題の深刻な点なのです。

高校に入学する前の私は、医療従事者でも何でもない一般人である私に出来ることなど何もないと決めつけていました。しかし、高校でカリタス部に入り、SDGsや日本や世界中の抱える問題について学んでいくうちに、少しでも困っている人々を私の手で助けることが出来たら良いのに、という思いが強くなりました。そこで、カリタス部で目をつけたのは「国境なき医師団」という団体です。

国境なき医師団とは、紛争や自然災害、貧困など、さまざまな理由で命の危機にさらされている人びとに、無償で医療・人道援助を届ける団体であり、活動の９割以上が個人をはじめとする民間からの寄付によって成り立っています。公式サイトによって、３千円で新型コロナウイルス対応の医療用マスク３２枚、１万円で新型コロナウィルス対応のゴーグルを１０点用意出来ることを知り、私は、今よりもコロナウイルスが猛威を奮っていた一昨年に、医療を世界に届けるため、友達と共に国境なき医師団の支援募金を校内で実施しました。初めて自ら募金を体験した感想は、集めるのは

容易なことではないということです。しかし、それと同時に協力してくれた人に対して、人間の温かみを感じました。なかなか思うような金額にはならなかったけど、少しでも医療に貢献できたことを嬉しく思いました。

さて、2030年までにSDGsは目標達成を目指さなければなりません。医療の面において、現段階で行われている対策のみで果たして達成できるのだろうか、と考えるとおそらく間に合わないと思います。高校に入学する前の私のように、自分に出来ることはないと決めつけている人が多いのではないでしょうか。しかし私は、まずこの問題に興味を持つことが一番大事だと思います。それに加えて実際に行動に移すとしたら、私たち一人ひとりに出来ることと言えば、やはり募金が一番身近であり、手軽に支援できる唯一の手段だと思いました。私は募金を求める側の大変さを体感したので、まずは、家族や友達に国境なき医師団の存在を広めたり、実際に募金をしているのを見かけたら、協力してみたりしようと思います。

また、その他に簡単に出来ることの事例としてキョクトウの学習ノートを買うことを挙げてみます。私は小学生の時にいつも買っていました。裏表紙に書いてあるように、売上金の一部がユニセフへの寄付になっているそうです。ノートを買うことが寄付に繋がるという一石二鳥の取り組みなので、誰でも挑戦しやすいのではないかと思います。この他にもSDGsに貢献している企業は増えつつあります。自ら調べて、自分にも貢献出来そうなものを探し、日常にSDGsの目標達成に向けた取り組みを少しずつ取り入れたいと思います。

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう

～「自分らしさ」の在り方 ～

サビエル高等学校　2年　高原（たかはら） 秋桜（あいさ）

０．６４７。この数字が何を指すか、皆は分かるだろうか。これは2023年現在の日本のジェンダーギャップ指数である。ジェンダーギャップ指数とは、世界各国の男女格差を０～１で数値化したもので０に近いほど男女格差が大きく、１に近いほど男女格差が小さいことになる。１位のアイスランドが０．９１２であるのに対して日本は０．６４７で１４６か国中１２５位と、あまり良くない結果だ。この結果から日本のジェンダーに関する意識の低さを改めて実感した。SDGsというと環境や貧困などのイメージが強いが、考え方をアップデートしなければならないのはジェンダーについても同じことなのではないか。

「男らしい」「女らしい」という言葉をよく耳にすることがある。幼少期にこれを言われた私は、大した疑問も反感も抱かなかった。それが当たり前でそのようにしなければ変だという日常の中で植えつけられた幼い価値観しかもっていなかったからだ。その価値観が変化したきっかけは二つある。

一つ目は、ある日「女の子なのだからそんなことしてはいけない。」と言われ、突然反感が込み上げてきたことだ。その反感は、

「それは女子だからしてはいけないのか。男子ならばしてもよいのか。」

というような、ほんのささいだが確かなものだった。類似したことは日常の中でしばしば起こる。大学の医学部入試で女性受験生が不利となる得点操作、家事育児などを一人で行うワンオペ育児、会社での女性管理職の登用の少なさ。これらの出来事は、本来であればあってはならない。更に言うならば、無くて当然であるはずなのだ。身体の性別は生まれたときから備わっているもので、変えることの難しいものだ。それを他人が決めつける条件にすることは、性別がどうであるかに関わらず、悲しみや憤り、虚しさの種にしかなりえない。確かに、性別によって可能なこと、不可能なことは異なる。しかし、それを優劣ではなく特性だと捉え、サポートし合うことはできないことなのだろうか。

二つ目は、私にとって身近な人が性に違和感を持っていると話してくれたことだ。

この人のことを仮にＡとしよう。それ以前は、LGBTQ+当事者のことをいかにも分かっているような顔をし、そのくせ他人事のように感じていた。そのような中のＡのカミングアウトは、私がジェンダーについて学び、見つめ直す絶好の転機となった。性別には生物学的な性、性的指向、性自認、社会・文化的な性であるジェンダーなど、様々な要素があること。その在り方は人によって違うこと。そして、私は女子だが服装は中世的なものが好みだという、自分の性的表現の個性に気づけたこと。これらの発見は、Ａだけでなく周囲の人への視野を広げることに対してプラスになった。その際に、ある言葉に出会った。それは「性はグラデーション」というものだ。これは、先に挙げた性別の様々な要素は線ではっきりと区別できるものではなく、人によってその度合いの向きや大きさが異なっている、という意味だ。この考えは性別という一つの分野だけでなく、一人の人としての個性を尊重する上でも重視すべきだ。

　そこで私は、一つの疑問に行き当たった。

「自分と違う性別（ここでは広い意味のものとする）の人と、どのように接したらよいのか。」

けれども、これにはＡと接する中で感じ取ることのできた答えがある。それは、

「特別視せず、個人と個人として話す。」

だ。最初こそ気を遣わなければ、認めてあげなければ、などと考えていた。しかし、それはおこがましいことだと分かった。その人がその人らしく在るのに、押しつけがましい誰かの許しも、上から目線の理解もいらない。私も私のことへのそのような気遣いをされたら、それは侮辱されたのと何ら変わらないように感じる。皆も同様ではないだろうか。

　この文章に自身について書かれることを快諾してくれたＡや、カミングアウトしたくないという人、する勇気が出せないという人、以前の私のように無関心だった人。この世界に生きる誰もが完全に分かり合うのは不可能かもしれない。それでも、一人一人の個性同士として接するというほんのわずかな心がけによって、最大限分かり合うことはできるはずだ。私はそう信じてやまない。

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

SDGs⑥：安全な水とトイレを世界中に

～ 祖父母の家での出来事から学んだこと ～

サビエル高等学校　3年　山口（やまぐち） 輝紗（きさ）

私の心に鮮明に刻まれている出来事があります。それは、今年の６月末に祖父母の家が豪雨に見舞われ、断水が続いた出来事です。このエピソードを通して、「安全な水とトイレを世界中に」というSDGsのテーマを考えてみたいと思います。

６月末、私は偶然祖父母の家に泊まっていました。雨が降り始めた時、祖父母の家はいつものように平穏な雰囲気を纏っていました。しかし、しばらくすると雨は激しさを増し、家の近くの川が増水しました。ひどい雨の音や風の音で真夜中に目が覚め、とても怖かったです。朝、目が覚めると近くの道路が冠水しているのが窓から見えました。幸いにも祖父母の家は高い所に位置していて浸水はなかったものの、朝から停電して家中の電気が使えなくなっていました。水がひいた後、祖父は冠水によって流された農作業の道具を回収しに行き、祖母はその間、停電の復旧作業を行っていました。もしも夜に停電していたらと考えると怖くなりました。

ところが、それだけでは済みませんでした。その後、水道も途絶えました。私は既に自宅に戻っており、祖父母からの電話でそのことを知りました。祖父母の家は山に囲まれた田舎にあり、自然環境に影響されやすい場所に位置しています。飲料水や生活用水が手に入らない上、トイレを流すこともままならない状況に祖父母はとても不便を感じていました。私はこの話を聞き、「安全な水とトイレを世界中に」提供する必要性を改めて認識しました。

SDGsの中で、第６目標である「安全な水とトイレを世界中に」は、持続可能な開発のために欠かせない重要な目標の一つです。水は生命の源であり、健康や衛生を維持するために不可欠な要素です。しかし、世界中にはまだまだ安全で清潔な水が不足している地域が存在します。調べてみると「安全な水」を利用できない人は世界の人口の約３分の１にも及ぶそうです。特に発展途上国や貧困地域では、水源が汚染されていたり、適切な衛生設備が整っていなかったりすることが多いことが分かりました。

私たちにできることは、日頃から節水意識を高めて生活することだと思います。水

の大切さや有限性を理解し、日常生活での節水を心がけることで、水資源の浪費を減らすことができます。例えば、歯を磨く際に蛇口を閉めたり、シャワーを浴びる時間を短縮することで、無駄な水の使用を防ぐことができます。

また、今回の断水を通して福祉の重要性も改めて感じました。断水から一夜明け、市が給水車を派遣し給水活動を行ったそうです。祖父母は市の素早い対応でとても助かったと言っていました。このことから地域全体として水資源の管理や再利用にも取り組む大切さが分かりました。雨水の貯留や浄化システムの導入、万が一に備え地下水の適切な利用など地域の特性に合わせた水資源の有効活用方法を模索することが必要だと思います。さらに、水の浄化や衛生施設の整備にも力を入れることで、衛生状態を向上できます。

私の祖父母の家での経験は、単なる一日の出来事として終わることなく、SDGsのテーマである「安全な水とトイレを世界中に」の重要性を改めて認識させてくれました。水は私たちの生活の一番近くにあり、当たり前のように使える今、その大切さに気づけていない人が多いと思います。手を洗うのにも気を使い、ふだん使えるものが使えなくなった後では遅いです。私たち一人ひとりの努力が積み重なり、一歩ずつ課題を解決し、持続可能な社会を築いていくことができるよう、SDGsの目標実現に向けて進んでいきたいです。

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞）

SDGs⑫：つくる責任つかう責任

～ フードロス ～

山口県立光高等学校　1年　上田（うえだ） 杏樹（あんじゅ）

『貧困をなくそう、飢餓をゼロに、すべての人に健康と福祉を。』これは、私がSDGsについて学んだときに興味と関心を抱いた目標であり、重要な課題です。それらと深くかかわっており、且つこの課題解決につながると確信した目標があります。それが、『目標⑫、つくる責任つかう責任』でした。

このことについて深く学んでいくうちに、貧困と飢餓に苦しむ人々が世界中に多くいること、その一方で、まだ食べられる食品が大量に廃棄されているというフードロスの実態を知り、世界の未来に切迫した危機感を感じました。このことは海外だけの問題ではなく、日本でも同じことです。現実に、日本は食糧自給率が４割を切ってしまうほどに低いにもかかわらず、10トントラック1,700台分もの食品を毎日捨てているというフードロスの多さは、大きな矛盾であり課題です。まさに一刻も早い解決に向けた行動が必要だと考えます。

私がフードロスというキーワードから思い浮かべたのは、小・中学校時代における給食時間の食べ残しの情景です。それは、私を含めた好き嫌いのある子どもや、小食の子どもが給食を残してしまうという場面です。このことについて、私の通っていた学校では様々な工夫を取り入れていました。具体的には、食材を食べやすい形にカットしてあったり、見た目も楽しめるようにハート形や星形にしてトッピングしたり、自分が食べたいものを選べるセレクト給食の日が設けられたりしていたためです。また、多くの食材をまとめて調理する際に、どうしても出てしまう調理の残渣を少しでも減らすため、野菜の皮を全ては除去せずに調理されていたこともありました。さらに、調理実習の授業においては、茶葉を再利用してふりかけを作ったり、野菜の皮を使ってキンピラを作ったり、天日に野菜を干して乾燥野菜を作るなどの体験を通して、食材を生かすことの大切さを学びました。また、季節に合った料理を作ったり、美味しい料理を食べる楽しさも学校生活の中で経験しました。私たちは、いつの間にか給食を残すこともなくなり、食べることが好きになり、料理の食材や味付けに興

味・関心をもつようになりました。振り返れば、食に関わるこれらの経験が、私が管理栄養士になりたいと思うようになった大きなきっかけとなりました。

管理栄養士は、豊かな食生活の実現と食の指導改善を担う専門職です。フードロス問題においても、食品製造、加工、流通などの様々な段階において、栄養学の観点から密接にかかわる職です。私は、望ましい食の未来に向けて鍵を握る職責の大きさを感じるとともに、食に関する専門的な知識や技能を生かしながら人々の健康の維持・向上に管理栄養士として貢献したいと強く思っています。

「2030年までに消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料の廃棄を半減させ、収穫後損失などを含めてサプライチェーンにおける食品ロスを減少させる。」とするターゲットの実現に向けて、近所のスーパー売場では商品の手前取りを店内放送で推奨したり、商品の値下げラベルに「食品ロス削減へのご協力ありがとうございます。」などの言葉を添えて消費者にフードロスへの関心を高める企業努力をしています。

そこで、私もできることからフードロス削減へのアクションをスタートしたいとの思いから、身近な生活を振り返ってみました。まずは、賞味期限と消費期限の違いを理解することです。せっかく買った物をうっかり忘れて期限が切れて捨ててしまう前に、もう一度きちんと表示を確認して賞味期限の一日か二日程度過ぎていたとしても品質を確かめて大丈夫なようならば食べてみようと思っています。また、購入した物は正しく保管して、置き場所もしっかり把握するようにします。次に、買い物で安いからとか、そのうち食べるからなどという理由で買いだめをしたり、買いすぎてしまうことをやめます。これからは必要な物だけを、必要な量、必要な時に購入することを心掛けます。今からすぐ、自分にできるフードロス対策に積極的に取り組んでいきます。

こうした小さな一歩でも、私達一人ひとりが意識を変え、食べ物の無駄をもっとなくし、大切に消費していくこと。この行動こそが、世界中の人々が将来にわたって暮らし続けられる持続可能な社会への実現に繋がると考えます。そして、世界で８億人以上もの人々の食べる物が足りず、慢性的な栄養不足に苦しんでいる現実から目をそらさず、より良い未来につながる行動を待ったなしで進めていく時が今だと思います。先進国の私たちと開発途上国の子どもたちとが、食事を分かち合えるような世界を目指すSDGsの目標達成に向けて、私も一助となり続けたいと考えます。

2023年度募集要項

第63回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

◈ **テーマ**　作文の題目は、「①本年はSDGｓの中間年。2030年までに17の国際目標から成るSDGｓを全て達成するために、日本ができることは何か。」、「②「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。」又は「③今年、加盟国最多の12回目の安保理非常任理事国となった日本は、どのような取り組みをおこなうことで、世界の平和と安全に貢献すべきか。」のうちいずれか一つとします。なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などを通し、国際連合について述べたものとします。

◈ **応募資格**　県内在住又は在学の中学校生徒または左記に準ずる在日学校在学生

◈ **原稿制限**　400字詰め原稿用紙４枚以内

◈ **賞**　特賞:２名、優秀賞:２名、特別賞:２名（副賞:図書カード、参加賞:文房具等）

第30回「高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト」

◈ **テーマ**　題目は自由。作文の内容は、持続可能な開発目標（SDGs）のうち、いずかれ一つを選択し、選択した開発目標について、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などについて述べたものとします。

持続可能な開発目標（SDGs）

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標

①貧困をなくそう
②飢餓をゼロに
③すべての人に健康と福祉を
④質の高い教育をみんなに
⑤ジェンダー平等を実現しよう
⑥安全な水とトイレを世界中に
⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに
⑧働きがいも経済成長も
⑨産業と技術革新の基盤をつくろう
⑩人や国の不平等をなくそう
⑪住み続けられるまちづくりを
⑫つくる責任つかう責任
⑬気候変動に具体的な対策を
⑭海の豊かさを守ろう
⑮陸の豊かさも守ろう
⑯平和と公正をすべての人に
⑰パートナーシップで目標を達成しよう

◈ **応募資格**　県内在住又は在学の高等学校生徒（全日制、定時制、通信制）、高等専門学校生徒（ただし、３年生まで）

◈ **原稿制限**　400字詰め原稿用紙５枚以内

◈ **賞**　特賞:２名、優秀賞:２名、特別賞:２名（副賞:図書カード、参加賞:文房具等）

共　通　事　項

◈ **締切及び審査と発表**

令和５年９月６日(水)必着。主催団体において審査し、10月下旬に入選者に連絡します。

◈ **応募作品の取り扱い**

①応募作品は返却しません。②入賞作品の版権は、主催団体に帰属します。③作品は自作･未発表のものに限ります。④中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。

◈ **個人情報について**

応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。

◈ **応募先・お問い合わせ先**

〒753－8501　山口市滝町１－１　山口県観光スポーツ文化部国際課内
日本国際連合協会山口県本部　TEL 083-933-2340 https://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/

令和５年１２月発行

発行元
日本国際連合協会山口県本部
〒753－8501 山口市滝町 1－1
山口県観光スポーツ文化部国際課内
TEL（083）933－2340

日本国際連合協会山口県本部